

《第 530 回(2025 年 12 月 11 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:11 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『ひと粒のチョコレートに』 佐藤 清隆／文, junaida／絵 福音館書店

12 月の課題図書は、『ひと粒のチョコレートに』でした。子ども向けの科学雑誌「たくさんのかしこ」から生まれたノンフィクション絵本です。口の中でとろけるチョコレートに、どんな性質があり、どんな工夫をして作られているのか、そして、私たちが食べられるようになるまでの長い歴史など、チョコレートのいろいろを知ることができる絵本です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

- *****
● チョコレートを口に入れたら溶けていくことは普通と思っていたが、不思議なことだった。以前に読書会で読んだ『コーヒーを飲んで学校を建てよう』(実生社)を思い出した。チョコレートは奇跡のような結晶、特別感があり「お菓子の王様」に納得。
● 食べ物になるまでに 1 万年かかるって、すごい技術革新だと思った。手軽に食べているが、いろいろな技術や偶然が重なってできている。大人にとっても目からウロコの知識がたくさんつまっていた。
● 1 万年の人類の歴史がつまっていることに驚いた。ヨーロッパに運ばれてからも 300 年は貴重な飲み物。時間の流れが壮大。この本を読んで調べて、日本の小笠原でもカカオ豆を栽培していると知った。1 冊の本から話が広がっていく楽しさを感じた。
● 自然の持つ力の偉大さを感じた。発酵、テンパリングなどの技術のほか、ヨーロッパへ持ち帰ったことで固まることがわかる。その後のココアやダークチョコなど、本当に奇跡のような食べ物。絵本だけど、情報量がすごく多い。
● 著者のチョコレートについての知識と junaida さんの絵が合わさってできた絵本。結晶が溶ける様子などが絵で表現されていて、わくわくした。いろいろな入口になりそうな奥深い、すてきな本。

- 手軽に食べているが、もっと敬意を持たなければと思った。お金としても使われていたカカオ豆、神様がくれた食べものとされ、貴重なものだった。低学年には難しいが、丁寧に書かれている。Junaida さんの絵をながめながら楽しく読んだ。
● 文章だけでは難しいが、絵がかわいくて、とても良い。自分の目の前にあるものが、どんな過程を経てできているのか知ることで味わい深く、生活が豊かになる。子どもたちの感性も豊かになると思う。
● 1 冊の本の中でいろいろなことを考えさせられる。生きとし生けるものは食べることが大事。物理、科学、経済などすべてにつながりそうな本。すべては相互作用で無駄なものは何もない。チョコレートの本だが、和菓子にも興味がわいてきた。
● チョコレートは特別感がある。Junaida さんの絵が大きさではないが、表情豊かで入りやすかった。人類の食べものへの探求心がすごい。生きるためだけではなく、おいしいという感情から、食べて幸せと感じるまでの道のりだと思った。
● カカオ豆の油の不思議、人とカカオ豆のつながりなど、チョコレートの壮大な歴史を知ることができ面白かった。地球の気候変動でチョコレートが高級品にならないことを願う。Junaida さんの絵本『の』(福音館書店)がお気に入り。
● チョコレートの複雑な仕組みに驚いた。カカオ豆を発酵させるために包むバナナの皮や箱に潜む微生物で味が変わってしまうことや、ミルクチョコレートができるまでの試行錯誤など、私たちがおいしいチョコレートを食べられていることに感謝。

次回 1 月 8 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

『空はみんなのもの』 ジャンニ・ロダーリ／文, 関口 英子／訳, 荒井 良二／絵
ほるぷ出版 ※申込み・参加費は不要です。